

比較・類推・相対化

東大京大生協で一番売れている本として、「思考の整理学（外山滋比古著）」という書籍が知られています。学問のみならず、日常の意思決定でも非常に参考になるコツが記されています。学生時代に読破した私は、もう一つの書籍「はじめての構造主義（橋爪大三郎著）」と併せて、「比較・類推・相対化」という方法論に辿り着きます。

比較・類推については、第4章の遺伝学を事例に散々取り上げました。酵母・線虫・シヨウジョウバエ・マウス・人間など、生物種同士で比較をすることで、生物としての本質的な法則が何かという洞察を得ることができます。そして、酵母という種でS₁r₂が活性すると寿命が延びるなら、他の生物種でも同様のことが言えそうだと考えるのが類推です。

最後に残った「相対化」とはどういう意味でしょうか。比較・類推というプロセスを通じて、自身が得た結論が絶対的なものだと確信しても、実はその限りではないという批判的吟味を伴う姿勢です。また、相対化は、何かしらの絶対的な存在を前提としています。あれこれと迷って何の仮説も持たないくらいなら、条件付きでも良いから一旦の結論、仮説を速やかに導き出すこと

の重要性も含んでいます。そうして、比較・類推・相対化を高速回転させることで、本質に近づきやすくなります。

例えば、学生時代に没頭した東京大学医学部アメフト部SCORPIONSでの活動。私にとっては、本質は部活動そのものではなく、部活動を介して『人間の本质』を掴むための知的で霊的な行為でした。同級生や後輩は、流石に偏差値80以上の集団です。弁も立てば行動力もある。思索の切り口は独特で、意見の衝突もしばしばでした。本質的なものを求めて、歴史を学ぼうとしたのは私だけではありませんでした。私は古代の歴史を学び、それでも変わらない『人間の本质』を求めました。一方、私の同級生は近現代の歴史を密に学び、そこから現代に至る『人間の本质』を求めました。私とその同級生は、それぞれ、自分の文脈で比較して、類推して、得られた結論は「歴史に学ぶ」ですが、その実践方法は全くの真逆でした。自分自身の方法を「相対化」して議論することで、より理解が深まったのは言うまでもありません。

もう一つ、例を挙げましょう。私は東京大学医学部出身であることに一定の誇りを覚えますが、同時に東京大学の限界も感じていました。それは、東大「らしさ」、アイデンティティーの問題です。慶応や早稲田といった私立大学には、創設者の理念が連綿と受け継がれています。しかし

ながら、東大総長の言葉は時代背景を反映します。いずれの総長の言葉も痺れるくらいに恰好良いのですが、100年単位で俯瞰すると、ご都合主義とも解釈できます。現在、「志ある卓越」が東大のキャッチコピーですが、これは私が学生時代にはありませんでした。自分なりの『医療観』と『社会観』を確立するために苦しんでいた私にとって、校訓という絶対的な軸が明確な私立大学は羨ましくてもうがなかつたのです。

結果として、私は父親との対話を通じて家訓を求めました。しかしながら、十分な回答を得ることができず、中高母校である洛南の校訓に行きつきます。弘法大師や空海にならって、「三帰」が校訓そのものでした。帰依仏Ⅱ自己を尊重せよ、帰依法Ⅱ真理を探究せよ、帰依僧Ⅱ社会に献身せよ。学生時代、研修医時代、外科医時代、現在のクリニック経営者時代、そしてこれから一貫して三帰の実践を目指しています。それもまた、絶対的なものではないのですが、現時点で数千年の教えを覆すものは無さそうに感じています。